INTERVIEW: インタビュー



1 作曲家を目指したきっかけ

一 音楽を始められたきっかけは、どのようなものですか。 4歳だったので記憶がないのですけど、幼稚園の中 にヤマハの音楽教室があって、そこに連れて行っても らったのがきっかけです。

―― その音楽教室で、その後の活動に続くような出会いがあったのですか。

そこでは、小学1年生から発表会があって、クラシックの曲と自分のオリジナル曲を発表させていました。 僕は作曲が面白かったので、作曲を続けることになりました。

――では小学1年生から作曲を始めて、ずっと続けている ということですか。

そうですね。その時から, 自分は作曲家になると思っていました。

―― その中でもいわゆる「サウンドトラック」(以下「サントラ」) の作曲の道に進まれるようになったのは、何かきっかけがあったのでしょうか。

父親がいろいろな音楽やオーディオが好きで、スピーカーやアンプを作っていたので、小さい頃から音楽を聴いて育ちました。その中にサントラのメロディがあ

って、素敵だなと思いました。クラシックでもジャズでもなくて、Jポップでも洋楽でもないけど、とてもきれいなメロディがあって、これは素晴らしいなと思ったのが映画音楽だったという感じです。

あとは大河ドラマを親と一緒に見たときに、オープ ニング曲がかかって、毛筆調の字体で作曲家の名前が 出てくるのを見て、かっこいいなと思っていましたね。

―― では少年時代から、いつかはご自身も大河ドラマの オープニングに名前をという思いがあったのですか。

はい。僕が手掛けた『軍師官兵衛』のときは毛筆調 ではなかったのですけど (笑)。

―― 大河ドラマの音楽では、印象に残っているものはありますか。

池辺晋一郎さんの『独眼竜政宗』とか、山本直純 さんの『武田信玄』は印象に残っていますね。僕が小 学生の頃で、かっこいいなと思ってしびれていました。

その後、映画や連続ドラマで、サントラの黄金期みたいなものがありました。みんながトレンディドラマを見ていて、ドラマの視聴率が30%ぐらいを余裕で取る時代があったじゃないですか。

--- 90年代前半ですか。

そうですね。僕は、その頃は中学生とか高校生でし

た。その頃、サントラ音楽では、服部隆之さん、大島 ミチルさん、岩代太郎さんといった、大活躍されている 作曲家の方たちの作品が多かったですね。ドラマ音楽 がとてもいい時期だったなと思いますね。

――楽器は、ピアノのほかに、大学でギターをやられていたのですか。

一応習っていました。あとは、小学生時代にトランペットをやっていて、中学生時代は吹奏楽部で打楽器をやっていて、太鼓やティンパニやシンバルや木琴を演奏していました。中学2、3年生くらいの時、シンセサイザーを買ってもらい、それで打ち込みもしていました。

―― 菅野さんの曲は、いろいろな楽器を使われていて、 ご自身が演奏しない楽器も使われているようですが、それ は支障なくできるものなのですか。

それは勉強しないとできないです。

あとは実際に音を鳴らしてみるときは、自分が書いた 譜面をバイオリンの人に「ちょっとこれを弾いてみて」 と頼んでいました。僕は東京音楽大学に入ったのです が、キャンパスの中には必ず楽器を勉強している人た ちがいるので、「バイオリンの人、集まって」と言うと、 「はーい」と集まってくれて、自分の曲を演奏してくれ たりするんですよ。

当時、僕がキーボードで、他にドラム、ベース、ギター、コーラス、フルート、サックス、トランペットという大所帯のバンドもやっていました。サックスとかは自分では吹いたことがない中で、譜面を書いて、いろいろ吹いてもらったりして、こういう音が出るんだとか、こういうのは苦手なんだとか、体で覚えていくみたいな感じでしたね。

2 サントラ音楽の作り方

――ドラマや映画のサントラは、どういう手順で作曲をされるのですか。

ドラマの場合は、10話まであっても、作曲の段階では、1話、2話ぐらいの脚本しか完成していないことがほとんどです。当然映像もないですが、その段階で、10話分の音楽をまとめて30曲ぐらい作って、最初に渡します。その後で、音楽の選曲を専門にやっている

方が、僕の音楽をドラマに貼り付けていって、ドラマを完成させるという手順なんです。だから、ドラマの場合は、実際のシーンに当てて作曲しているわけではないんです。

映画の場合は、映像の編集が出来上がったものをも らって、その映画に自分で音楽を付けていきます。

アニメの場合は、1個のアニメにつき40曲~50曲ぐらいのメニュー表みたいなものがあるんです。楽しいときの音楽、悲しいときの音楽、戦っているときの音楽、主人公のテーマという感じのメニュー表があって、そのメニュー表を見ながら一個一個作っていきます。アニメの場合も、基本的には映像は事前にもらえないので、映像を見ないで作曲して、選曲する方は別にいます。

―― ご自身が作曲した曲が画像と組み合わされたときに、 使われている場面がイメージと違うということはないですか。

そういうこともあるのですけど、プロが集まって一つ の作品を作るものなので、音楽を選曲の方に預けたら、 そこはもう選曲のプロがやっているわけですから、そこ にまで口出すつもりはありません。

―― お互いの信頼関係ができあがっている感じですか。

はい。僕がよく選曲の方と話すのは、僕がおいしい料理を作って、それをお客さんにどういう順番で出すかということです。いきなりステーキが出てきて、次にデザートが出てきて、次に前菜が出てきたら、高級なフランス料理が台なしになるじゃないですか。優秀なサーブをする人は、食べるスピードとか、食べるタイミングとか、食べる順番とか、いろいろ考えて出していきますよね。コックさんが料理を作って、サーブする人がいてというところにプロフェッショナルな信頼関係がなかったら、最終的にお客さんに喜んでもらえないと思います。

3 フルオーダーメードの曲づくり

--- 作曲にあたって、どのような点を意識しているのですか。

例えば、僕が洋服のデザイナーで、僕に洋服を作ってくださいと言うお客さんがいたら、人によって体形も違うし、どこで着るかというTPOも違うし、どういう印象を持たれたいかということも違うわけですよね。合コンで着たいのか、結婚式で着たいのか、真面目な



相手が何を望んでいるのかを意識して フルオーダーメードで音楽を作っていきます。 最終的にこの人に頼んでよかったなと 思えてもらえたら理想ですね。

菅野 祐悟

会議で着たいのかで、全然違うじゃないですか。だから、 場面によって、その人が一番素敵に見えるように洋服 をデザインします。

それは、相手が何を望んでいるかということです。 この映画は、どういう音楽を作ったら一番素敵に見え るのかを考えて、フルオーダーメードで音楽を作って いきます。しかも、頼んだ側としても自分だけの音楽 というオリジナリティを感じられるものを提供できたら いなと思っています。

―― フルオーダーメードで作るために、打合せで気をつけていることはありますか。

必要なことはたくさん聞きます。監督でもプロデューサーでもいろいろな人がいるので、口ではこう言っているけど、本当のところはどうなのというところまで掘り下げて打合せをします。この映画をどういうふうに見せたいんですかとか、どういうお客さんがターゲットなんですかとか、それによって全然音楽の作り方が変わってくると思うんですよね。そういうことは必要があれば聞きますね。

本当に満足してもらうために相手が何を望んでいる のかを意識するのは、たぶんどの仕事でも同じだと思 うんですね。

――お聞きしていると、弁護士の仕事と共通すると思うのですが、プロフェッショナルとして、この人から依頼が来たので、この人に満足をしていただくための付加価値を付けるということを相当意識されているように感じます。

それはありますね。

例えば、弁護士さんでも、最終的に高い金額を取れなくても、短い間で紛争を終わらせる方がいいというクライアントもいるかもしれませんよね。要はクライ

アントが何を求めているのか。例えば、お金を求めているのか、心の安心を求めているのか、和解したいと思っているのか。弁護士さんの性格やコミュニケーション能力でそれに対応できるかどうかで、顧客満足度も全然違うと思うんですよね。

一 おっしゃる通りですね。

僕もそうで、早く曲が聴きたいと思っているのか、 ぎりぎりでもいいから、いいものが上がってくればいい と思っているのか。あとたくさん打合せをしたいと思っているのか、そうではないのか。本当に人それぞれ なので、それに合わせて仕事をしていくべきだと思い ます。最終的にやっぱりこの人に頼んでよかったなと 思ってもらえたら理想ですね。

4 東京弁護士会のイメージ動画

―― 東京弁護士会のイメージ動画の音楽をご担当いただきましたが、あの曲はどのような意識で作曲されたのでしょうか。

僕は弁護士さんのお仕事に詳しくないですけど、僕の印象だと、自分が幸せになりたくて頼む人が多いと思うので、最終的にクライアントが幸せになることが一番だと思うんですよね。そういう意味でいうと、弁護士さんはお医者さんに近いのかなと思います。お医者さんに診てもらって、悪いところがあって、そこを治してもらったら、とても幸せな気持ちになって、健康ってこんなに素晴らしいんだと思いますよね。同じように、裁判中の人は平穏な気持ちでいられないかもしれないですけど、それが弁護士さんに頼むことによって、少しでもいい結果になったら、笑顔になれるのかなと思います。

INTERVIEW: インタビュー

あの動画では、弁護士さんは人に幸せになってもらって、笑顔で「ありがとう」と言ってもらえる仕事なのかなと思って、そういう温かい気持ちみたいなものを手助けできるものが作れたらいいなと思って曲を作りました。

割とすんなりとイメージが湧いてきた感じでしょうか。 動画の映像自体がとても解りやすく作ってあって、 打合せの段階で目指す方向性を明確におっしゃっていたので、作りやすかったですね。

― 2分40秒の動画ですが、限られた時間で表現するのは難しくなかったですか。

2分40秒あると、1つの物語が作れます。15秒の CMだと、15秒の中で物語を築かなければいけないの で難しいのですが、それに比べたらだいぶ楽ですね。

少し専門的な話になりますが、音楽は、最低単位が 8小節みたいなところがあって、メロディを1つ紡ごう とすると、できれば8小節ぐらいは欲しいんですよ。 それが16小節になると、さらに紡ぎやすくなります。 2分40秒あると、言いたいことはある程度言えるかな という感じです。

―― 東京弁護士会の動画に関して、メッセージをいただけますか。

いい感じでできたと思っているので、ぜひ観てもらいたいし、聴いてもらいたいなと思います。

5 これまでの作品と今後の活動

―― 菅野さんは数多くの曲を作られていますが、あえて 一番のお気に入りを選ぶとしたら、どれになりますか。

全部自分の子どもみたいなものなので選べないです ね。ただよくクリエーターの方たちが言うように、最新 の作品が自分の一番の代表作と言えるのが理想です。 かっこいいことを言うようですけど、満足してしまった ら終わりみたいなところがあって、自分の作品一つ 一つに対して、やっぱり反省があって、そこをさらに クリアできるようにしたいという気持ちを持ってやって いかないと伸びていかないじゃないですか。そういう意 味では、一番の新作が今の自分の一番最高のものだと、 胸を張れるようにしたいなという気持ちはあります。

―― 今後のご予定をご紹介いただけますか。

先日,交響曲第1番を書き上げて,コンサートで発表しました。その録音のCDが今後発売される予定です。現代の作曲家が交響曲を発表するということはほとんどないので、自分の作品がどういう風に世の中に受け止められるのかに興味があります。

― 交響曲第1番は、どういうコンセプトで書かれたのですか。

『ザ・ボーダー』という題名にしました。 境界線という意味です。

自分の意識の裏には、意識をコントロールしている 無意識みたいなものがあって、それは例えば幼少期に どういう教育を受けたかとか、そういうことで人間は どんどん凝り固まって、自分の意識をコントロールし てしまっていると思うんです。そういう意識と無意識 のボーダーラインみたいなものは、どこにあるのかなと 思ったときに、寝ているときの夢があるのかなと。自 分は何で悲しくて、何に怯えていて、何に喜びを感じ ていて、今何を意識しているのかみたいなことが自分 の夢に現れる、夢診断みたいなものがあるじゃないで すか。そういうことを考えて作った曲で、自分の夢を 夢日記みたいなものに付けて専門家に診断してもらっ て、自分が何に縛られて曲を作っているかみたいなこ とをコンセプトに作った曲です。

--- それは楽しみです。

また、来年の2月12日には毎年やっているバレンタインコンサートがあります(「菅野祐悟バレンタインコンサート2017」,2017年2月12日(日)昭和女子大学人見記念講堂16:00開場/16:30開演)。交響曲も演奏しますので是非見に来てください。

プロフィール かんの・ゆうご

1977年生まれ。東京音楽大学作曲科卒。数々の映画、ドラマで楽曲を手掛ける作曲家、音楽プロデューサー。主な作品として、TVドラマでは、2014年NHK大河ドラマ『軍師官兵衛』の他、「ホタルノヒカリ」、「ガリレオ」、「SP」、「新参者」、「謎解さはディナーのあとで」、「花咲舞か黙ってない」、「昼顔」、「銭の戦争」など。映画音楽では、「SP野望篇」、「SP革命篇」、「麒麟の翼」、「踊る大捜査線 THE FINAL新たなる希望」、「真夏の方程式」、「謎解さはディナーのあとで」、「劇場版MOZU」、「幕が上がる」など。2010年映画「アマルフィ女神の報酬」で日本映画批評家大賞「映画音楽アーティスト賞」と日本シアタースタッフ映画祭「音楽賞」を受賞。